

## 平林初之輔とその時代(2)・大正9年

渡辺和靖

Kazuyasu WATANABE

(哲学教室)

### I ロマン主義宣言

平林初之輔は、大正9年(1920)3月、当時一流の文芸雑誌『新潮』に、評論「ロマンチック時代」を掲げ、文壇へのデビューをはたした。それは、「文壇偶語」という雑録欄への登場であったが、これ以後、主要な執筆者として、10月には「文芸時評」を担当するに至る。

これにともなって、平林の執筆活動は活発化し、『文章世界』『中央文学』『サンエス』『早稲田文学』『読売新聞』などに、評論や時評を発表する。

また、「ロマンチック時代」が、翌月の『新潮』で、宮島新三郎によってただちに批判されたように、平林に対する文壇の反響も、ようやくかまびすしくなっていた。『新潮』のゴシップ欄から、主なものを捨てみよう。

その言説には全部的に首肯し難いところがあるとしても、近時発表された平林初之輔、野村一意、村松正俊等の新人の論文や批評に現はれた精神は、前に云った力の現はれ(現状打破——引用者)の一部と見て間違ひはないと思ふ。(大正9年10月「不同調」55頁)

新進評論家として文壇の革新とか、革命の文学とか云つて、才気煥発の文章を続々として発表しつつある平林初之輔君は早稲田出身の秀才である。君は少しも早稲田臭味がなく、孤立してやつてゐる人だが、それだけにどこか人物に面白いところがあつて、漂渺たる趣があるさうだ。(同年11月「文壇風聞記」133頁)

いろ／＼の批難はあるにしても、少くともシツカリと自己の立場を守つて、大いに新進気鋭さを發揮して闘つた平林初之輔(同年12月「不同調」57頁)

快男児平林初之輔君は新年早々矢張り砲撃手としての陣営を張り、盛んに「破壊」「爆発」の射撃を続けてゐる。惜むらくは、まだピストルの鋭鋒あつて、巨砲の偉力なきことだ。一つ何十サンチとか云ふ巨砲を据へて、一挙にして、粉碎し尽すやうな工夫をしては如何。(大正10年2月「不同調」113頁)

こうした文壇ゴシップのうちからも、平林の置かれた場所を、わずかなりとも彷彿させることができよう。いってみれば、平林は、従来にない傾向を備えた一人として、文壇において孤独な闘いを続けていたのである。

ところで、デビュー作「ロマンチック時代」である。この作品を分析することは、平林が、文壇に対して、どのような姿勢でのぞんだかを知るうえで、きわめて重要な意味を

もっている。

冒頭、平林は、今後日本の文壇にいかなる文学が望ましいかと問い、「私は之に対して即座にロマンチズムだと答へる。」と記している。

リアリズムに徹底せよといふ言葉を近頃よく聞く。例へば宮島新三郎氏の如きは熾んにリアリズムを主張しておられる。けれどどうしてリアリズムに徹底出来るか？ リアルといふことが文学上にどれだけの価値をもつてゐるか？ 角を矯めて牛を殺す！ リアリズムは文学そのものゝ本質と矛盾するではないか。

リアリズムの限界を指摘するものとして、平林は、エミール・ゾラの「自然主義とは性情を徹して観察されたる自然の芸術である」という言葉と、アナトール・フランスの「顕微鏡は物の大きさを拡大して見せるけれども肉眼の誤謬を訂正はしない。誤謬は誤謬のままに拡大される」という言葉を引用している。

フランスの言葉は、まだしもわかりやすい。それは、すぐあとに続く「リアリズムに徹底せよと叫ぶのは迷ふた人類に何処までも迷へよ迷へよとすゝめることに他ならぬ。」というセンテンスにかかっている。

しかし、ゾラ言葉は、いったい、平林のどのような主張を裏づけているのか。このことは、必ずしも明確ではない。おそらく、それは、つぎのパラグラフの「吾々は性情や気質で着色された人間である。吾は吾の運命と共に生き、彼は彼の運命と共に生きてゐる。」という部分と関係づけたとき、はじめて理解されるであろう。

つまり、平林は、ゾラ言葉によって、人間の「性情」を離れてありのままの「自然」といったものがあるのではなく、それぞれの「性情」を通して「自然」は与えられる、と主張しているのである。

そうした平林の理解を支えているのは、カント流の近代認識論である。「芸術に科学的客観性を求めるのは間違いである。そこには価値の普遍性だけしか求められない。而してそれはリアルではなくてイデアルなものだ。」と述べるとき、平林は、明らかに、新カント派の、文化科学の理論をふまえている。

「現在の社会状態はロマンチズムにふさわしくないといふ人もある。」しかし、現代からすべての美しいものが失われてしまった、というような嘆きが発せられるのは、いまある現実をただただ受け容れるだけの「現状満足主義」に立っているからなのだ。

ブルジョア全盛の今日、趣味も道徳も其の他一切のものがブルジョアに奉仕したとて其芸術もさうなければならぬ理由はない。誰かゞ陰惨なる晩秋の空にたとへたプロレタリアの生活にも芸術はある。それはロマンチズムの芸術だ。反抗の芸術だ。否芸術そのものが反抗的なのだ。真の芸術は何時の時代にも反抗から起つてゐる。

そのような「反抗」の例として、平林は、イギリス、ドイツ、フランスのロマン主義、ロシアの近代文学などを挙げる。「反抗とは徒らに現実にまきこまれて階級闘争の煽動機関になることでは勿論ない。」ここでいう「反抗」とは「人道の擁護」であり、「真の詩人」とは「グレート・ソールの人」であり、「人類愛の人」である。

最後に、平林は、つぎのようにこの評論をしめくくる。

日本の今の文壇には此の意味の反抗が少しもない。感激もなければ批評もない。

そこにあるのはブルジョアに媚びを売る幫間文学のみだ。いまの文壇はブルジョア趣味に腐敗して反抗も生氣も失つた水溜りだ。

この水溜りを清浄するには生温い、しかもそれ自身に矛盾をもつたリアリズムでは駄目だ。どうしてもロマンチズムでなければならぬ。明日はロマンチック時代だ。

(『平林初之輔文芸評論全集』——以下『全集』——下巻, 3~5頁, 昭和50年, 文泉堂書店)

平林が、ロマン主義者として出発したことが、第一に確認されなければならない。ここに示された、「自由主義」としての、「現状打破」としての、「リアリズム」否定としての「ロマンチズム」という観念こそは、変転する平林の文学観の根底にあるものであった。<sup>(1)</sup>

第二に、そのロマン主義は、決して政治的な意味をもっていないということである。平林が「ロマンチズムは自由解放の文学である。革新の文学である。反抗の文学である。現状打破の文学である。」というの、そのまま政治的変革を志向するものではなく、リアルなものはイデアルなものによって根拠づけられなければならないという、新カント派的な認識を示すものである。もちろん、大正8年の段階ではほとんど見られなかった、ブルジョアプロレタリアという視角が、しだいに平林をとらえはじめていることは注目しなければならない。<sup>(2)</sup>

第三に、平林のロマン主義は、具体的には、当時文壇の主流をなしていた「自然主義」への批判であったことが確認されなければならない。平林のいう「リアリズム」とは、日本の自然主義文学を支える発想を指している。<sup>(3)</sup>

既に論じたように、平林が『新潮』に登場するキッカケとなった『やまと新聞』での文芸時評に見られる唯一の一貫した主張は、日本の文壇に支配的な自然主義的傾向に対する批判であった。そのような総括に立って、平林は、自らをロマン主義者として規定づけたのである。<sup>(4)</sup>

自然主義に支配された文壇への登場の仕方として、それは決して得策ではなかった。事実、平林の主張は、翌月の『新潮』に載った、宮島新三郎『「ロマンチック時代」の筆者へ』によって、冷罵をもってむかえられることになる。それは、「れい〜しく私の名前を引合ひに出」された宮島個人の感情的反発、という面もなくはなかったが、「私達」という宮島の言葉使いにも示されるように、当時の文壇人の一般的な見解をも代表していた、と見ることもできる。

宮島は、平林の議論を、「私達が写実主義の誤謬として耳にたこの出来るほど聞かされたもの」であり、「狭い意味の古くさいリアリズム(写実主義)にしかあてはまらないもの」であると決めつけ、「リアリズムに関する私の議論をどれだけ読んで下さったか」と「疑問」を呈し、「全然リアリズムを写実主義と解して言ったことなどない私の所論に対して、君が写実主義と解してゐることが何よりの証拠です。」と指摘する。

宮島は、そこから、リアリズムの議論へと話を進めるのではなく、平林のもの言いに話題を向け、「日頃から頭のいい人だときいてゐたのに」と皮肉をきかせながら、次のように批判を加える。

全体の論の調子にも妙に勢がありさうで、其の空虚疎な犬の遠吠え若しくは空吠えのやうな所も気になりました。ロマンチズムを主張するにしても、単に革命だの、反抗だの、現状打破だの、建設の為の破壊だの、人道の擁護だのと言葉だけは熱のある威勢のいい調子で羅列されてはゐるが、その処から終に筆者の気持や熱意がさう感ぜられませんでした。(中略)今少し落着いて腹の底から物を言つて貰ひたい気がします。最う少し物を細かく深く見たり考へたりして貰ひたいと思ひます。(『新潮』大正9年4月、

126～8頁)

平林が真正面から問題にとり組んでいるのに対して、宮島は、わけ知り顔でたしなめることによって、問題を横にいなしているという感がある。このようなやり方は、島村抱月<sup>(5)</sup>や生田長江<sup>(6)</sup>が白樺派の人道主義を批判したやり方を思い出させる。自然主義は、このようにして、答えるべき問題から身をかわしたまま、ズルズルと今日まで延命してきたのではなかったか、と思わずにはいられない。

宮島の批判が自然主義者に共通の反応であるとすれば、文壇のうちには、既に、そうした反応を苦々しく考える人々も育っていた。木村毅の「不平二三」(『新潮』大正9年9月)は、そうした層を代表するものであった。木村は、<sup>(7)</sup>「i, 色々な議論に対して、其麼事は疾くの昔に論じつくされた事で、今更問題とするに足りないなどと、ひどく高飛車に物を言ふ人がある。」と論を起し、次のように述べている。

たとへば何時だったか平林君が本誌の本欄に『ロマンチック時代』と言ふ一文を書いて、現実主義に対し『顕微鏡は物の大きさを拡大して見せるけれど、肉眼の誤謬を訂正はしない。』と書いたら、ある人達が『其麼非難位は自然主義当時にもあつて、充分論じ盡された事だ。』と言った。

名指しはされていないが、ここで批判されているのは、宮島新三郎である。木村が、宮島を「ある人達」と複数形で呼んでいることは、彼が、宮島の背後にそれを支持する勢力がひかえていることを自覚していたことを示している。「ある人達」に対して、木村は、自らを「私達」と呼ぶ。ここで、明らかに、宮島のいう「私達」と、木村のいう「私達」が対峙している構図が浮かびあがる。

さて、木村は、「私達は前に論ぜられたからどうと言ふことは問題にしたくない。」と、平林を擁護し、次のように続ける。

只与へられた問題が、今日の問題としてどれだけ必然性を持つて居るか、どれだけ吾々の胸に触れて来るか、どれだけそれに今日の人間であるらしい解釈が施こされて居るか——その点が気がかりになるのである。(121頁)

木村の発言が示すように、自然主義によって代表される日本の近代文学が内包する根本的な問題を、真面目に議論しなければならない、とする雰囲気は文壇の一角に生じていた。平林の登場が、多くの批判をまき起こしながら、ある種の新鮮な衝撃力をもちえたのは、そのためである。

大正9年は、第一次世界大戦による好況が一挙に戦後恐慌へと転落する最初の年に当たっていた。

4月10日付の『東京朝日新聞』が、はやくも「失業者がぼつ<sup>(8)</sup>と」と伝え、やがてそれは全般的な傾向へとなっていく。その中でも、とりわけ注目されるのは、知識階級の失業が増大していることで、8月18日付の『東京朝日新聞』、9月11日の『時事新報』などがそれを報道している。

この年の1月『やまと新聞』社を退社した後、平林は、秋、市川正一の紹介で、青野季吉につづいて、国際通信社の翻訳係として就職するまで、文字通り失業者であり、その間、大類伸の『フランス革命史』執筆のための資料翻訳の助手と、『新潮』などの稿料とで生活していた<sup>(9)</sup>。

この時期の平林にとって、生活費を獲得するという意味でも、文壇で認められること

は、きわめて重要なことであつたにちがいない。そして、文壇に出ることを至上の目的とするものにとって、自然主義こそが最も有力な武器であつたはずである。

しかし、平林にとって、文壇に出るということは、第一義的な意味をもたなかつた。それは、自己の主張を發表すべき場、という以上の意味をもたなかつた。

この頃平林と知り合い、のち、プロレタリア文学運動の同志となつた青野季吉は、「未完成自画像」(『群像』昭和25年5月)という戦後の回想で、当時の文学青年について、次のように述べている。

「明治の末期から大正初期へかけて青年時代をもつたさうした青年には、はつきり二つの型があつた。」一つは「はつきりと作家や詩人そしてたまには批評家にならうと野心した青年」であり、他は「作家とか、批評家とかになりたといふよりも、その前に「人間になること」といふ觀念に支配されてゐた」青年である。前者は「文壇的文学青年型」、後者は「反文壇的文学青年型」と名づけることができよう。(『青野季吉選集』340頁、昭和25年、河出書房)

青野が確認しているように、まさしくこの時期、文壇にとられることなく、自由におのれを主張する、新しいタイプの文学青年が出現するのである。

## II ロマン主義の展開

大正9年の8月から10月にかけて執筆された三つの論文、「現実と眞実」「文学革命の意義」「反抗的精神と文芸」は、平林が「ロマンチック時代」において表明したものを、さらに展開したものである。この間、平林は、これ以外に多くの評論や時評の類を執筆しているが、ここでは、上の三つの論文にしぼって、平林のロマン主義の展開を追つてみたい。

「現実と眞実」は『新潮』大正9年8月「文壇偶語」欄に掲載された。ここで、平林は、「現実と眞実とは本来無関係のものである。」と、「現実」と「眞実」を峻別することによって、「リアリズム」批判をさらに徹底しようとしている。「神の世界、眞実の世界の可能を信ずると、たゞ現実を絶対価値視するとにロマンチズムとリアリズムとの分岐点がある。」

論拠として、平林は、ドストエフスキーとオスカー・ワイルドを援用する。前者は「世の中に無いやうな人間をも描いた。それ故に最も眞実であつた。」また、後者は「人生は芸術の模倣だと言つた。」たしかに「論理の上からは芸術は人間生活以上だ。」

平林の関心は、ここでも、徹頭徹尾、認識論的である。それは、「科学は経験に初まるけれども経験以上の眞理をもつてゐる。科学の眞理は一切の経験を支配する。」という部分にもっともよく示されている。平林は、「経験以上の眞理」つまりアプリオリなものによって「経験」を構成したものが科学である、という新カント派的な理解に立って、イデア的なものこそがリアルなものを規定しているのだから、その逆ではないことを主張しているのである。

平林は、つまり、当時のもっとも進んだ、田辺元の次のような科学理解と同じ立場から発言しているといえる。田辺は、岩波哲学叢書の一冊として出された、もっともポピュラーな『最近の自然科学』(大正9年)において、素朴實在論的に定立された「自然」概念を厳しく批判して、「自然界なるものは吾人の経験の概念的構成の産物である」としてい

る。(『田辺元全集』第2巻, 100～2頁, 筑摩書房)

だから、平林が、「芸術家は一種の社会改良家でなければならぬと僕は思ふ。」というとき、つづけて「それは理想をもつてゐなければならぬといふことだ。」と述べていることから明らかなように、それは、認識論のレベルでいわれているのである。

資本制度と商人と政治家と軍人とが意識的無意識的に民衆を虐めてゐる此の社会で「現実を凝視せよ」といふやうなマキシムが守つて居られやうか？ 現実は大々存在するといふだけのものだ。其の他に何等の必然性をもつて居らぬ。しかも現実にはbeingではなくbecomingである。(中略)これを正当な方向に向けようとするのは、文人の遊蕩生活を描くことより価値が少いだらうか？ 而もそれが大部分制度の罪である事が明白であるのに、芸術家がそれを批評するのは無駄な事だらうか。

このような立場から、平林は、自然主義の原理たるリアリズムに対して、決定的な攻撃を加える。「リアリズムの精神」がどれほど洗練されたとしても、それが「現実」を容認するかぎり否定されなければならない。「個人生活に於て道德的、法律的に欠点のない人でも現在の社会を容認してゐる人は人類と真理とに対する罪人である。」

最後に、追いつちをかけるように、平林は、次のように結論する。「現実に対してはこれを破壊するか逃避するかより外に道はない。唯これを容認し、これに執着し、これを讚美することだけは許すべからざることだ。」(『全集』下巻, 19～22頁)

「現実と眞実」は、さきに「ロマンチック時代」において論じたところを、別の視点から再説したものである。基本的に平林の立場が、認識論のレベルにあることも同じである。

ただ、ここで注目されるのは、「現実」を「制度」として捉える視座が前面にせり出しつつある点である。個人の善意とは無関係に、現実を容認すること自体が罪悪であるとする視座は、既に、「理想」「人類」といった新カント派の人道主義を越える契機を内包している。この延長上に、プロレタリア文学論が位置していることは明白である。

しかし、現実を否定していく方向性として、「破壊」の他に「逃避」が考えられているように、平林のロマン主義は、決して一義的にプロレタリア文学論へと収斂していくものであったと結論するのは誤りである。

「文学革命の意義」は、『文章世界』大正9年9月号に発表された。冒頭、平林は、「現実には囚はれて習慣の世界と眞実の世界とを混同してゐる人達は習慣以外の世界の存在を想像だもしない。」と述べ、これまで「現実」と呼んでいたものが、じつは、「習慣の世界」に他ならないことを明らかにする。

たしかに、「現実と眞実」においては、現実と眞実とを、あまりにも固定的に対立させたきらいがあり、現実そのものが人間によって構成されたものであるという側面が、ほとんど背景に没失してしまっていた。ここで、「習慣」という概念が導入されることによって、その側面があざやかに顕在化した、といえる。

平林は、ここで、徹底して、「現実」が作られたものであることを力説する。「眞理」とは「習慣」によって「粉飾」される以前の状態であり、ルソーに従って平林は、これを「自然の状態」と名づける<sup>⑧</sup>。

現実とは此の自然の状態に習慣の粉飾の加わつたものである。しかも此の習慣の粉飾は長い時間に徐々に人間の本性に喰ひ入るのであるから、うつかりすると人は不純な現実を人間の本性と誤認するに至るのである。

平林は、さらに議論を展開する。現実論者の様々な「現実」概念を分析し批判した上で、「かゝる粗笨な議論は到底厳密な哲学的批判に堪へ得ない」と断定する。「今の文壇には哲学や科学の説を頭から嘲笑する悪い癖がある」が、「嘲笑する方よりも嘲笑される方の思想が却つて進んでゐる。」<sup>(9)</sup>

このように、「現実」を作られたものと規定することによって、平林は、「現実を奥深く探る」というリアリズムの無効性を証明しえたばかりでなく、自らのいう「革命」即ち「破壊」が、「習慣」「粉飾」を否定し、「人間の本性」「自然の状態」に帰ることに他ならないと主張しえたのである。「革命の風潮は今や人類に最も深い関係のある社会革命の大事業に向つてゐる。」「社会生活」のある部分では、「刻々自然の状態に帰りつゝさへあるやうだ。」ところが「現実といふ文字」<sup>(10)</sup>に拘泥する文壇は、「現在の所最も安全なる保守主義者の避難所の観を呈してゐる。」

何度もくり返して言うように、問題は、あくまでも、認識論のレベルである。ここで、平林が、「文学革命」といい「社会革命」といつていることから、文学を政治的変革と直結させていると結論してはならない。

平林は、現実と関わらないものには人生問題を論じる資格はない、という意見に対して、「今の世の中で何もしないことはさう恥辱でないと思う。怠惰の時に人間は最も自然に近づく。現代の畸形的文明の奴隷となつて機械のやうに勤勉である時は人間は卑屈、虚偽等あらゆる悪徳の権化である。」と答えている。

さきの「現実と真実」で、平林は、現実に対する可能な態度として、「破壊」と「逃避」をあげたが、「革命」が「破壊」に対応するとすれば、「何もしないこと」は「逃避」に当る。それも、また、平林にとっては、現実を否定する一つの契機に他ならなかったのである。<sup>(11)</sup> (『全集』下巻、23～7頁)

大正9年10月、『サンエス』に発表された「反抗的精神と文芸」は、量的にも質的にも、「ロマンチック時代」以降の平林のロマン主義の主張を総括する位置にある。ここにおいて、彼のロマン主義のモチーフが、文壇の自然主義的傾向に対する批判にあることが、あからさまに示される。

まず、平林は、「現代といふ特殊の時代」を明らかにするために、ルネサンス以後の近代文学の流れを概観する。その上で彼は、次のように述べる。

現代は概括的に言へば自然主義時代であると言へる。けれども細かく見てゆくと自然主義に対する反抗時代といつても差支へない。併し、まだ自然主義を一撃に打ち壊す程の強い力がないから、自然主義衰退時代といふのが最も正確に近いだらう。

もともと自然主義は、「自然科学の精神」を文芸にとり入れたものであり、うわつた「前代のロマンチズム」を破壊した。「併しこの態度が今日の後継者に厳密に維持されてゐるかどうかが私の多大の疑問を抱く点である。」彼らは、「自分は科学の影響などは少しも受けてゐない」と言うかもしれない。たしかに、彼らは科学的知識が乏しいが、それだけかえて「科学の最も悪い一面」に支配されているのであり、それが「現在の日本の無感激の常識文学」を形成している。

科学そのものが、既に、変化しつつあるのだ。平林は、科学の内部に漲っている「反抗の気運」へと論を進めていく。

理論物理学においては、ニュートン力学のデターミニズム(決定論)が、相対性原理の発

見によって、決定的に覆されつつある、と平林は指摘する。数学もまた、非ユークリッド幾何学の成立によって、「千古不易の真理の体系」ではなく、「特殊の人工的要素」を含むことが明白になった。<sup>(12)</sup>形式論理の根本原則である「同一原理」(A is A)でさえ、否定するものが出現した。

このように、今日の進歩した科学にあっては、かつて疑うべからざる真理とされていたものが、次々に否定され、「革命の犠牲<sup>ヴィクチム</sup>」となっている。しかるに「現代の文学(しかも日本文学)」においてはどうか。

自然主義者たちは、「一切の偶像を捨てたのは吾々が第一番であつた」と言うかもしれない。しかし、彼らは、「旧式の科学と数学と論理とをつきまぜた常識という偶像」を、古い「ロマンチストのイリュージョン」に置きかえたにすぎない。「この常識崇拜の傾向は勿論文芸評論の大部分をも占めているが、何よりも小説の全部を風靡してゐる。」

平林は、「常識をわざわざ文芸作品によつて教へられる必要は絶対はない」と断ずる。「文学革命の意義」において、彼は、「現実」を「習慣」と規定したが、ここではそれを「常識」と言いかえる。「ありのままの」現実とは、じつは、「常識」にはほかならないのだ。「多くの小説家や批評家が考へている「現実」といふものの正体は「常識的見解」といふこと以外に出てゐない。」そして、「常識を最も確実なものであると考へる思想、例へば塩は鹹く、人間は滅多に自殺をせず、男は女に惚れるものなりといふやうなことをきめてかかる思想位文学に禁物なものはない。」

ドストエフスキーは、『悪霊』の中で、シャートフに、スタヴローギンに向かって、「つまり常識に対する挑戦が強く君を誘惑したのです！」と語らせている。「反抗的精神」「常識に対する挑戦」こそが重要なのだ。「現実を無視せよ」と私が言ふのはこの為である。」

「自然主義、現実主義、必至主義」に対する「反抗の方法」は、ヨーロッパの例から見て、二つある。

一はデカダンによりて代表され、他はアイデアリストによつて代表されてゐる。ポーやヴェルレーヌのやうなデカダンの詩人はただ現実に押しつぶされて退廃し外道に落ちてゐたのではない。(中略)彼等は現実に反逆してゐたのである。版でおしたやうな平板な退屈な現実、亀の甲のやうにかたくなつた習慣、微温湯のやうな無刺戟な常識を破らうとしてゐたのである。これと反対にカーペンターやホイットマンやトルストイやロマン・ローランのやうな人々は真正面から常識に対してオフエンシヴをとつてゐる。メーテルリンクにしてもチエーホフにしても悉く墮性的リアリズムに対する反抗者である。ドストエフスキーの如きに至ると二つの方法を同時に用ひて完膚なくリアリズムの「偶像」をたたき壊してゐると言つていい。

ここで平林が、「反抗」の一点において、デカダンとアイデアリストの両者をともに評価しているのは、さきに「現実」に対する可能な関わり方として「破壊」と「逃避」の二つをあげていたことに対応している。自然主義を越える方向性として、平林が、ポーやヴェルレーヌなどのデカダンを高く評価していたことは、注目しておくべきであらう。<sup>(13)</sup>

このように、外国では、「常識的見解、リアリズム等を固執してゐるものは一人もない。」ところが、日本では、「これから革命の第一歩を踏み出さねばならぬ。」(『全集』下巻, 32~41頁)

平林のロマン主義は、自然科学の発展を無視して主観的な神秘の世界へ向かおうとするものではなく、科学的な知識をふまえた上でそれを越えようとするものであるところに、その最大の特質をもっている。彼は、自然主義者たちが描写の対象として前提する、「ありのまま」の「現実」とは、結局のところ、人間の「習慣」あるいは「常識」のことであり、そのようなものを破壊するところにこそ文学の任務があるとする。

このような平林の主張の根底には、現実の主観的な構成物であるとする新カント派の認識論がある。現実が主観的な構成物であることは、自らの主観的な絶対性を放棄し、相対性のうちに身をゆだねることによって、逆に、自らの主観性を自覚した新しい絶対性を構築する道を開くものであった。それは、古い理想主義を否定した自然科学が、その先端の部分において、新しい理想主義へと脱皮しつつあるという時代認識によって支持されていた。

こうした平林のロマン主義の主張に対して、相田隆太郎が「一つの視点から」(『新潮』大正9年12月)で異議をとなえている。しかし、その調子は、かつての宮島新三郎のように居たけだかなものではない。平林の主張が、無視しがたい力をもって文壇のうちに浸透しつつあるのを見てとることができる。

相田は、平林の主張を次のようにまとめている。「いつだか平林初之輔氏は現実とは常識と習慣の堆積であるから現実と真実とは無関係だといふ意味のことを言はれた。」この総括は、だいたい正確である。しかし、それにつづけて、「僕のこゝに言ふ現実とは、さういふ意味の現実ではない。」と述べて次のように論ずるとき、相田がどれだけ平林の主張、とりわけその認識論的基礎を理解していたか疑問である。

僕は現実を真実と虚偽との不離的交錯体と見る。否交錯といふ言葉は生温い。不離的燃焼体と見る。従つて謂ふ所の現実とは我々の心と行為の交錯燃焼を意味する。従つて経験とか体験とか言はれるものもこゝに謂ふ現実の範疇にはいる。

相田のいう「不離的燃焼体」が、もし、主体としての「真実」と、主体が「習慣」「常識」にまで固定した「現実」との弁証法的な関係を意味するとすれば、それは、「真実」と「現実」を二元的に対立させる傾向のある平林に対する正当な批判となりえただろう。しかし、そのような「主体」の意味が、相田に少しも理解されていないことは、次の部分から一見して明らかである。

現実を深く正しく知るために、作家は岩石から金属をふき分ける熔鋸爐のやうに心熱を燃やし、灼熱した精神のサアチライトを以て真実と虚偽を照らし分けねばならない。その精神のサアチライト——それは矢張り作者の良心である。人格の光輝である。(中略) 真実と虚偽とは寧ろ作者のスピリットの燃焼の深度(誤解され易いから強度とは言はない)によつて決せられると言へると思ふ。

意味がありそうで、深味がありそうで、そのじつ、ここにあるのは、哲学的レベルでいえば、カント以後どころか、カント以前の素朴実在論にすぎない。「現実」は単に客体として措定され、主体は単にそれを「照らし分け」るだけの受動的なものとなり、問題は、精神の燃焼度といった内面性へと矮少化されてしまう。現実には正しく受容されるべきものであり、ここでは、平林の力説する「現実」への反抗など、まったく問題にならない。

相田は、認識論に対する無知をさらけ出した。相田の立場は、平林の言葉でいえば、「文

芸上には現実主義をとり、人生観上には理想主義をとるという」（前掲「反抗的精神と文芸」34頁）、矛盾にみちた折衷主義に他ならない。従って、その結論も、「リアリストは本質的にロマンチストでなければならない」というような、問題の焦点をはずした、きわめて曖昧なものとならざるをえないのである。（「一つの視点から」142～3頁）

このように見てくるなら、平林の哲学的素養、とりわけ自然科学の基礎づけに関する知見は、当時の文壇において、ずばぬけたものがあつたことがわかる。平林のロマン主義宣言とその展開が、文壇に対する公然たる挑戦であつたにもかかわらず、無視しがたい影響力をもちえたのは、そうしたところに起因するであろう。

### Ⅲ ロマン主義の課題

平林が、文芸評論家としての出発に当って、ロマン主義を提起したこと、そしてそのこの意味は、今日、必ずしも十分注目されていないように思われる。おそらく、プロレタリア文学運動の先駆的な理論家としての平林に対する評価のみが高く、この時期を、単に、それへ至る前段階として位置づけてしまう結果、ロマン主義に独立した意味を見出しえないのであろう。

その典型を、伴悦の「平林初之輔論」（『現代文学研究叢書Ⅰ』昭和41年10月、芳賀書店）に見ることができる。平林のロマン主義を「〈不自然と虚偽〉の〈習慣の粉飾〉に満ちた〈現実〉への〈破壊〉」と要約した上で、「一気に〈革命文学〉まで駆けあがる意識的姿勢がそこにはあるようだ。」として、この時期を次の時期へと直結させてしまう傾向が、そこには見られる。（135～6頁）

これに対して、渡辺正彦の「平林初之輔試論」（『日本近代文学』15、昭和46年10月）は、平林のロマン主義の時期を論じた数少ない論文の一つである。次にそれを見てみよう。

大正8年の文芸評論は、大正9年の「ロマンチック時代」以降、「自由解放の文学」「革新の文学」「建設の文学」「文学の本質としてのロマンチズム」というイメージで結晶し、現実偏重、経験尊重、リアリズムを否定する。こうした「文学革命」への志向が、民衆のための文学という主張を内包していたとしても、この時期、平林は、「文学革命」と「社会変革」を「峻別」しており、「闘争芸術」「手段としての芸術」を説くに至る後の時期とは異なり、「あくまで作品それ自体による「致命的批評」にとどまる形で、…現実と相渉っていたのである。」（49～51頁）

この指摘は、ロマン主義をのちのプロレタリア文学論から区別し、そこに独自の意義を求めようとしている点で、傾聴させるものがある。が、既に見たように、この時期、平林は、「社会変革」は必然「文学革命」をもたらすであろうし、「文学革命」は「社会革命」の一環であると考えていたのであり、平林のロマン主義を、「既成の文学の変革」として、文学の領域にのみ限定し、プロレタリア文学論をそれからの逸脱とする氏の評価は、それを矮小化してしまっている。

平林のロマン主義は、人間と現実との関わりに対する認識論的な問題意識から発想されていたのであり、それは決して、文学の問題に局限されるものではなかった。この点を見のがしては、最も根本的なモチーフが欠落してしまうことになるだろう。

昭和6年8月、平林の死の直後、『新潮』に掲載された青野季吉の「平林初之輔論」は、最も早い平林論であるばかりでなく、目くばりのよくきいたすぐれた平林論であり、

今日の多くの平林論にも大きな影響を与えている。青野は、平林のロマン主義を見のがさなかつたばかりか、その根底にある認識論をも正しく評価している。

平林は、社会主義への「転向」以前において、既に「一部の人々からは、頭の極くいゝ、流動性に富んだ批評家だと認められてゐた。その時期の平林は、一口で言へば、一種のヴィヴイドな直覚力と、澄んだ知識性をもつて、作品をかなり自由に大膽に批評し、その基礎には、さき一寸触れたやうに、当時の偏現実主義にたいしてロマンチズムの要求を置いてゐた若い批評家であつた。」

「彼の批評に光彩をそへた」二つの「武器」があつた。それは、平林の「歴史的知識」と「物理科学的知識」である。とりわけ後者は、はやくから深く平林を捉え、アインシュタインの相対性原理やポアンカレの科学論に興味をもっていた。その影響で、「平林の認識の方法に、いつまでも経験批判主義の痕跡をとどめた。否、それを発展させずらしたのだ。」

私は、平林の「懐疑」にはよほど深い根柢があつたと考へてゐる。つねにヴィヴイドな疑問を自己に構へたのは、勿論彼の並ならぬ聡明と冷静から来たことでもあつたが、遠く認識論に脈を引いてゐないでもなかつたのだ。ポアンカレ哲学の不可知論的要素が、たしかに彼の認識の方法に執拗に作用してゐた。(29～32頁)

青野は、平林との長い交友をもとに、平林のロマン主義と、その根底にある認識論を指摘し、それが平林に本質的なものであつたことを正しく証価している。しかし、それは、あくまでも、平林がそれ故にマルクス主義の弁証法を正しく理解することができず戦線から離脱せざるをえなかつた、という文脈においてである。

青野の平林論は、その後の多くの平林論の発想の源泉となつたが、青野の指摘のうちで、平林のロマン主義とその認識論的基礎については、ほとんど無視され、それに対して青野の下した、マルクス主義を放棄する原因となつた、という評価だけが広く流布することになった。

しかし、当時の日本のマルクス主義の思想的レベルを無視して、ただ平林が事実として日本共産党から脱落したというだけで、平林がマルクス主義を歪曲したというのは早計であろう。平林は、認識論の批判に<sup>(16)</sup>十分耐えることのできるマルクス主義の創出を求めていたということも考えられるからだ。

平林のロマン主義が無視されるもう一つの根柢として、ロマン主義そのものが、その後のプロレタリア文学運動の展開のなかで、克服されるべきものとして考えられていった、という歴史的事情を指摘することができる。そのような観念の形成に決定的な影響を与えたのは、蔵原惟人の「プロレタリア・リアリズムへの道」(昭和3年5月)であつた。

蔵原のこの論文は、「全国無産者芸術連盟」(ナップ)の機関誌『戦旗』創刊号に発表された。「これは、それまでほとんど扱われなかつた創作方法の問題を正面から取り扱つた、という意味で、しかも、プロレタリア文学者がとるべき方法、少くともその基本的な一つとして、「リアリズム」を積極的に押し出した、という点で、出色のものであつた。」(祖父江昭二「プロレタリア文学I」『岩波講座日本文学史・13』34頁、昭和34年2月)という、高い評価をうけている。しばらく、この論文の行論を追ってみよう。

「近代的リアリズム」は、「ロマンチズムの反動」として生じた。「ロマンチズムは没落しつつある地主階級の文学であつた。」これに対し、「新興ブルジョアジーのイデオロ

ギー」としての「自然主義文学」は、「現実への復帰，因習の打破，個性の解放をそのモットーとしてあらわれてきた。」つまり，自然主義は「リアリズムをもって出発した。」彼らは「現実を現実として，なんら粉飾なく客観的に描きださうと努めた。」

しかし，「ブルジョアジーの歴史的限界性」は，その「リアリズムに一定の限定をあたへた。」自然主義は，「哲学上における形而上学的唯物論」に依拠し，人間を「生物的本性」から捉え，「社会」は視野から見逃された。そのため「彼らの生活——現実をたいする認識の態度があくまでも非社会的，個人的である。」彼らは「自然科学者の客観性」をもっていたが「社会科学者の客観性」をもたなかった。

「プロレタリア作家はこの自然科学的リアリズムを克服して個人的にたいする社会的観点を獲得しなければならない。」プロレタリア作家は，なによりも「階級的観点」を獲得しなければならない。「この観点を獲得し，それを強調することによつてのみ真のリアリストたりうる。」

このように「プロレタリア・リアリズム」は「ブルジョア・リアリズム」と区別されるが，同時に，プロレタリア作家は，「過去のリアリズム」から，その「現実に対する客観的態度」を「継承」しなければならない。「客観的態度」とは，「無差別的冷淡的態度」のことではなく，「現実を現実として，なんら主観的構成なしに，主観的粉飾なしに描かうとする態度」のことである。

我々にとって重要なのは，現実を我々の主観によつて，ゆがめたり粉飾したりすることではなくして，我々の主観——プロレタリアートの階級的な主観——に相応するものを現実のうちに発見することにあるのだ——かくしてのみ初めて我々は我々の文学をして真実にプロレタリアートの階級闘争に役だたせうる。（『現代文学論大系・4』80～7頁，河出書房）

蔵原の，この論文をふくめたプロレタリア・リアリズム論に対して，飛鳥井雅道の「近代文学における個人」（『文学』昭和37年5，6，8月）が批判を加えている。氏の関心は，従来，日本近代文学の研究が「自我」の確立という視点からのみ分析評価されてきたことへの不満から発して，「共同体」の問題を座標軸にすえようとするものであった。氏の提言は，それなりに有効なものであるが，ここでの問題は，平林のロマン主義である。その点からすれば，飛鳥井氏の蔵原批判は，ほとんど問題の所在から離れている。

蔵原のリアリズム論の最大の問題は，自然主義文学を「ブルジョア・リアリズム」と批判しながら，その「現実を現実として，なんら主観的構成なしに，主観的粉飾なしに描かうとする態度」は継承すべきであるとする矛盾にある。

自然主義の，描写の対象としての「現実」を主体の外に単純に前提してしまう素朴実在論をそのままにして，それを「ブルジョア・リアリズム」と規定したところで，少しも批判したことにはならない。そのように主張することによって，かえって，日本のプロレタリア文学は，自然主義の伝統を，その最も本質的な部分を批判することなく，そのまま受け容れてしまったのである。中村光夫は，文学的回想『今はむかし』（昭和45年）の中で，プロレタリア文学は「私小説の思想にマルクス主義をつぎ木した」と二度にわたって指摘している。（中公文庫版，31頁，43頁）

飛鳥井雅道は，さきの論文で，ルカーチを引いて，自然主義は，リアリズムではなく「リアリズムの墮落形態」であるとして，リアリズムそのものを救済しようとしている。

(前掲論文, 101頁) また, 明治期の「自然主義」と大正期の「私小説」を厳密に区別しようとする考え方もある。<sup>(17)</sup>(西田勝「日本近代文学史における大正の位置」『文学』昭和38年11月)

しかし, そのような見解が, たとえ文学史的になんらかの意味があるとしても, 平林自身「あるがまゝのものを肯定し, 存在を絶対価値と見做すのが, 現実主義者に共通の前提である。」(『読売新聞』大正9年11月, 『全集』下巻468頁)と指摘しているように, その哲学的基礎が, 「現実を現実として, なんら主観的構成なしに, 主観的粉飾なしに描かうとする」という素朴實在論にあるかぎり, 思想史的には, 同一のレベルにあるものとして考える他はないのである。

「主観的構成」とは, 世界はあらかじめ意味をもったものとして人間に与えられるのではなく, 認識という人間の主体的な営為を通して構成されるということであり, カント哲学の基本であり, 近代認識論の本質である。ポアンカレの科学認識論は, そうした主体による構成を自然科学の分野において展開したものであったし, 田辺元が指摘するように,<sup>(18)</sup>アインシュタインの相対性原理もまた, カント哲学の正しさを証明するものであった。

もちろん, 近代認識論は, とりわけ, その主体が抽象的であり, 社会的歴史的現実の上に十分定位されていないという点で, 一面的な部分をもつものであった。しかし, それは, 現実をありのままに描くといった単純な主張によって克服されるようなものではなかった。近代認識論を越えるとは, 主体の意味をふまえた上で, 主体と主体を結ぶ新しい共同性を創出すること, であつた。<sup>(19)</sup>マルクスといえども, 『経哲草稿』に示されているように, カントからヘーゲルに至るドイツ観念論哲学を十分ふまえた上でそれを越えようとしている。<sup>(20)</sup>

自然主義文学は, その成立の当初, 既に, 安倍能成によって根本的な批判を受けていた。<sup>(21)</sup>その後, 石川啄木<sup>(22)</sup>, 和辻哲郎<sup>(23)</sup>などによって批判を加えられている。しかし, 安倍や和辻の批判は文壇外からなされたものであり, 啄木は若くして逝つた。日本の自然主義は, この時点に至るまで, 自らの哲学的基盤に対して, ほとんど深刻な反省を試みないまま, その根本的な欠陥に眼をつぶりつづけてきたのではなかったか。

平林は, 「大正9年の文壇を評す」(『新潮』大正9年12月)と題する時評文で, 次のように述べている。「大家としてのの人々を一瞥すると, 文壇の中心勢力が, どうやら大家を離れてゆかうとしてゐる傾向が目につく。」島崎藤村は「息つぎの形」であり, 田山花袋は「文壇的意義を失ひ」, 徳田秋声や正宗白鳥は数編を発表したが, 「描写の筆が益々冴えて行くに反比例してその鑑賞の境地が益々狭隘になつてゆく」。(『全集』下巻, 482~3頁)

平林の指摘するように, 自然主義文学にとって, 大正9年という時点は, 一つの転換期であつた。その大著『自然主義の研究』(昭和33年)の中で, 吉田精一は, 次のように記している。

明治最末期以降自然主義文学は文壇の主潮たる位置をはなれたが, 有力な作家の活動をのこし, 文芸思潮としても一隈に有力な存在をつづけた。自然主義の孤立的個人主義と根本的に背反する階級思想的文芸思潮の一般化するのは, 社会主義同盟の創立を見た大正9年ごろで, この年には自然主義最後の牙城たる「文章世界」が廃刊され, 有力な闘將たる岩野泡鳴の死を迎へ, 花袋, 秋声の生誕五十年記念は恰も花袋の文壇退場の告別式となるなど, いくつかの出来事を合はせて, 自然主義運動滅亡のメルクマルと見ることが出来る。(下巻, 567頁)

また、和田謹吾も、さらにこれらの事実に加えて、白鳥の退隱と藤村の沈黙をあげ、大正9年は「自然主義にとってはかなり決定的な年」であり、それにかわって「左翼文学論」が勃興したと論じている。（「大正期の自然主義」『文学』昭和39年11月、26頁）

このように、文学史的には、大正9年は、自然主義からプロレタリア文学への転換の時期に当たっていた。平林も、その転換の重要な担い手の一人であった。自然主義は、ほとんど死にかけていた。しかし、新しい文学は、なしくずしにそれにとって代ってはいけなかったのだ。自然主義のうちに孕まれた問題点を根底的に抉剔し批判した上でそれを乗り越えていくべきであった。

平林は、そのことに自覚的であった。彼のロマン主義は、哲学的基礎にまでさかのぼって自然主義を批判し、新しい文学の拠るべき土台を指し示そうとするものであった。そして、そこにこそ、プロレタリア文学への前史としてではなく、それに固有の意義をもったものとしてのロマン主義の役割があったといえる。

（昭和57年9月1日受理）

#### 註

- (1) もちろん、このロマン主義は一年をへずして、プロレタリア文学論へと展開していく。しかし、また、平林は、プロレタリア文学運動から離脱した後、再びロマン主義へと復帰する。この両者のどちらが平林にとって根本的かといえ、ロマン主義であったといわざるをえない。プロレタリア文学論はロマン主義の生んだ児なのであり、その逆ではない。
- (2) 拙稿「平林初之輔とその時代(1)・大正7年8年」『愛知教育大学研究報告』第31輯（人文学部）、昭和57年2月参照。
- (3) ここでいう「自然主義」とは、単に文学的な党派としてのそのみならず、その嫡流としての「私小説」や「心境小説」などをも含めて、描写の対象を外界のうちに措定し「ありのままに」それを写しとるといふ文学理論に立つものの総体をさす。
- (4) 前掲拙稿、122頁。
- (5) たとえば、抱月は「将に一転機を画せんとす」（『時事新報』大正6年）で、人道主義や民衆芸術の提唱に対して、「現代の物質と権力との社会を動かす為には未だ〜力が弱い」とか「物の黒白は概念的には何んなにでも明瞭と付ける事が出来る」などと批判している。
- (6) たとえば、長江は「自然主義前派の跳梁」（『新小説』大正5年11月）「最近思潮の逆転」（『文芸雑誌』同年同月）などで、白樺派とりわけ武者小路実篤を、自然主義以前であると決めつけ「彼等の単純は、何等の複雑を包容した、消化した、克服しきつた単純でない。」「浮世の風にあたらぬあらゆる箱入息子の例外なしにもつてゐるやうな、極度にまで廉つばい単純である。」としている。さらに「自然主義前派の跳梁に息の根をとめてやるまでは、この筆をおかないつもりだ。少くとも彼等が文壇思想界の本流へのさばり出ることを思ひ止まるまでは、彼等が彼等のもとの片隈へ引つ込んで小さくなってしまふまでは」「私は決してこの筆ををかないつもりである。」とまで高言している。（『明治文学全集』76、359～366頁、昭和48年、筑摩書房）
- (7) 「年譜」『全集』下巻、888頁。
- (8) ここで平林が「自然」という概念をもち出したのは、「自然主義」の「自然」が本当の「自然」ではないことを示そうとしているからであろう。同じ発想は、萩原朔太郎にも見られる。朔太郎は生田長江の「自然主義前派」という規定を意識しつつ次のように述べている。「「誤まった今日の文明を打破して自然の純真に帰れ」といふ原始自然主義の思想は、その「現に有るがままの自然を肯定して現に有るがままに生活せよ」といふ後期徹底自然主義の思想とは到底相容れることのできない反対の感情である。」今日の「文壇」においては、「ルツソウ的な「情熱ある自然主義者」や

- 「熱血的なる自然派文学」は、「浪漫主義と同格なる感傷文学として嘲笑されねばならなかつた。」(『新しき欲情』大正11年。『萩原朔太郎全集』4, 99頁, 昭和50年, 筑摩書房)
- (9) この部分で平林は、その最初期の論文「現代日本の哲学者」に引用されていたと同じアリオッタの論文を引用しているが、そのように、平林がその出発の時から豊かに身につけていた哲学的素養が、その文芸評論の背景にあることを忘れてはならない。前掲拙稿117～9頁参照。
- (10) 社会が急激な変化に見まわられているにもかかわらず、文壇だけはそれにとり残されているというのが、はやくからの平林の確信であった。前掲拙稿参照。
- (11) このことは、北村透谷「人生に相渉とは何の謂ぞ」(明治26年)、夏目漱石『それから』(明治42年)などに既に見られる発想である。
- (12) 自然科学がその先端の部分で既に理想主義への反動を内包していたということは、平林の最初の論文「文明批評家としての北吟吉」ではやく指摘されていた。前掲拙稿116頁。
- (13) 後に平林が探偵小説へと向かうことになる根拠が既にここにある。
- (14) 平林は、この年大正9年4月『新潮』所載「新作家七人論」で細田民樹を扱った部分で次のように述べている。「芸術の基調は神秘である。(中略)真の神秘は現実を回避することによつて生ずるものでない。一切の神秘思想家は其の背後に惨憺たる悪戦苦闘のドツキユメントをもつてゐる。(中略)プロセスを省略した神秘には神秘の価値がない。(中略)世間のイージー・ゴーイングな享楽家、神秘家、皮肉家達よ、卿等の思索と体験の過去はあまりに空虚であるとは感じはしないか?」(『全集』下巻, 13頁)この引用文中にある「悪戦苦闘のドツキユメント」という部分は、あきらかに西田幾多郎の『自覚に於ける直観と反省』(大正6年10月)「序」に見えるものである。西田のこの著作については、平林ははやく「我国現代の哲学者(中)」において、「博士自ら「思想上に於ける悪戦苦闘のドツキユメント」と告白された「自覚に於ける直観と反省」(『新時代』大正8年1月, 123頁)として言及していた。西田はその書の「序」で「刀折れ矢尽きて降を神秘の軍門に請ふた」と書いている。(『西田幾多郎全集』2, 11頁, 岩波書店)平林のいう「神秘」も、西田と同じく、認識を尽してその果てにあらわれる神秘であった。このように、平林は、哲学の領域に広く目配りをきかせるばかりでなく、その先端の部分で文芸評論の課題として自らに引きつけているのである。
- (15) 例えば田辺元は、この頃、新カント派的な立場から、そうした立場へと移行していく。拙稿「田辺元における弁証法の展開——大正から昭和への思想史」1, 2『愛知教育大学研究報告』第28, 29輯(人文科学)昭和54, 55年参照。
- (16) 平林が、日本共産党から離脱して後晩年に至るまで決してマルクスの思想を放棄していないことは、昭和4年9月の論文「唯物論の最近における発展」を一瞥すれば明らかである。そこで平林は、マルクスの思想を形而上学的に固定化しようとするやり方を批判し「それは、思惟の産物である形而上学ではなくて、経験科学の研究の結果が与へる総合的世界観」とであると論じている。(『全集』中巻, 482～92頁)平林のたどった思想的な軌跡を単に「転向」と呼んですませてしまうことは、そこに働く内面的なモチーフを把握するという努力を放棄してしまうことにしかならないだろう。
- (17) しかし、私小説は白樺派の流れをくむものであり、自然主義とは別ものであるというのは正しくない。それは、むしろ、片岡良一がいうように、白樺派は「結局のところでは、自然主義と相似た結論に到達してしまつたのであった。」というように評価すべきであり、そこにも自然主義の根強い伝統を見るべきであろう。(『片岡良一著作集』第1巻, 112頁, 中央公論社)
- (18) 拙稿「初期田辺哲学の形成——大正思想史のこころみ」『愛知教育大学研究報告』第27輯(人文・社会科学), 昭和53年, 139～40頁。
- (19) 田辺の「種の論理」、三木の「構想力の論理」などに代表されるように、大正から昭和にかけての課題は、近代認識論を学ぶことによってあらゆる規範から自律した人間が、そうした自律した人間と人間の関わりをどのように確立していくかであった。
- (20) 次のような引用を示せば十分であろう。「動物はただ自分自身を生産するだけであるが、他方、

人間は全自然を再生産する。動物の生産物は直接その物質的身体に属するが、他方、人間は自分の生産物にたいし自由に立ち向かう。(中略)それゆえ人間は、まさに対象的世界の加工において、はじめて現実に一つの類的存在として確認されることになる。この生産が人間の制作活動的〔werkartig〕な類生活なのである。この生産を通じて自然は、人間の制作物および人間の現実性として現われる。」(マルクス『経済学・哲学草稿』60～1頁、城塚登・田中吉六訳、岩波文庫)「自然の人間の本質は、社会的人間にとってはじめて現存する。なぜなら、ここにはじめて自然は、人間にとって、人間との紐帯として、他の人間にたいする彼の現存として、また彼にたいする他の人間の現存として、同様に人間的現実の生活基盤として、現存するからであり、ここにはじめて自然は人間自身の人間的あり方の基礎として現存するからである。」(同、133頁)また、アレフレート・シュミットの『マルクスの自然概念』(元浜清海訳、法政大学出版局)は、マルクスは自然を「決して媒介を欠いた客観主義の意味で、つまり存在論的に理解しているのではない。」(11頁)と断言している。「一たん観念論哲学が、とくにそのカント的形態において、直観的に与えられた経験世界は決して究極的なものではなく、つねにすでに、形成し統一を与える主観的作用の結果であることを明らかにしたのちでは、唯物論的批判の本質は、それが素朴客観主義に逆戻りすることを望まぬかぎり、観念論的洞察そのものを抽象的に否認することではありえず、対象的经验世界とそれに関する統一意識が可能であるような、もはや観念論的ならぬ新たな問題把握のうちにあるということ、マルクスは意識している。」(120～1頁)

- (21) 拙著『明治思想史』(昭和53年、ペリかん社)32～5頁。
- (22) 石川啄木は「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」(『スバル』明治42年12月)で、「自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に」「国家」をも容認してしまっているのではないかと批判し(『啄木全集』第4巻、224頁、筑摩書房)、さらに「時代閉塞の現状」(明治43年8月)において「自然主義」はいまや明確な「敵」を発見しなければならないとして、一切の「既成」の容認に向かう傾向を厳しく批判している。(『啄木全集』263～5頁)
- (23) 和辻は「既に一転機、到れり」(『時事新報』大正6年3月)において、抱月に応じて、自然主義は「自己の内生の「あるがまゝ」に満足して」「「あらねばならぬ」何物をも持つてゐなかつた」とし、それ故に結局「自然主義は根本に於て現代の社会を肯定してゐる」と述べている。「併し新機運を造る人々は、現代の社会の悪を認めてゐる。その経済組織の根本をなす所の各人の物質的貪欲にしても、その政治機関を動かしてゐる政治家たちの低級な権力欲名誉欲にしても、それが人間の自然的欲望である故を以て直に是認されてはゐない。」(前掲『明治文学全集』76、374～6頁)

[付記] 引用文中、新字体のある漢字はそれに改め、傍点の類は省いた。